



第16回卒業生石井春子さんの足跡－中学生のみなさんに－ 校長 三村 孝志

「苦学」という言葉があります。「働きながら、苦勞して勉強を続けること」と中学生向けの国語辞典では、その意味を説明しています。当校の三年生二人に「くがく」ってどういう漢字を書くのだろうと聞いてみました。予想はしていましたが、答えられませんでした。これは当校の生徒が漢字を知らないことを示すのではありません（当校の生徒は優秀です）。時代が変わり、「苦学」という言葉を生徒が使わなくなったことを示していると考えます。

当校卒業生の石井春子さんからお手紙をいただきました。第16回卒業生（昭和38年3月卒業）の方です。昨年（平成28年10月15日）、上野で行われた「川東中学校同窓会東京支部の集い」に出席されていたとのこと。現在の生徒数を知り、当時の生徒数と比べ、時代の流れを感じていらっしゃるようでした。石井さんのときの卒業生徒数は202人でした。

現在、臨床心理士、精神保健福祉士として御活躍されています。また、特定非営利法人コスモスの会（在宅精神障害者を支える会）の理事長を32年間されています。

御自身の足跡が、昭和53年1月の新潟日報に掲載されているとお手紙にあったので、新潟県立図書館で、新潟日報の記事を読んでみました。27面、28面が川東中学校の記事です。若き日の石井春子さんの足跡を、みなさんに伝えたいと思いました。

石井さんが、大学進学を意識したのは高校時代です。農作業を手伝いながら、新発田商工高等学校川東分校に通っていた時期です。次のように述べられています。

大学に行きたいと思ったら、親や周りから一笑に付された。自分の力で行くしかないから、いろいろ考えました。

石井さんは「いろいろ考えました」と語っています。これを、ただ「ああ、いろいろ考えたんだなあ」と受け取ってはならないのです。時代性、地域性をしっかりと理解しなければなりません。新潟日報の記事では、「川東地区は新発田市の穀倉地帯」と書いています。また、第16回卒業生は「終戦直後のベビーブームの世代」でした。農作業の繁忙期には「当然のように学校が休みになった」のであり、中学生は「貴重な労働力として扱われた」という時代でした。

総務省統計局のデータによると、昭和40年の、四年制大学への女性の進学率は、4.6%です。大学院進学率は1.9%でした。「一笑に付す」とは「とり合わないで、笑って終わりにする」という意味ですが、当時はそのような対応が当たり前だったのです。反対されたわけではなく、反対されたのであれば、取り合ってはくれているので、反論ができます。その機会さえなかったということでしょう。「勉強したい」「大学に進学したい」と言えば、親や周りが、それに諸手を挙げて賛成してくれる、今のような時代ではなかったということです。よほど強い意志をもち、夢をかなえようと決意しなければ、大学進学をあきらめていた時代であったとも言えるでしょう。当時の「当たり前」に合わせるように行動していたら、石井さんの人生は違ったものとなっていたかもしれません。

石井さんは、高校卒業後、東京の化粧品会社に勤めます。しかし、受験勉強のために一年後に退社します。朝から夕方まで神田のパラーで働き、早朝、深夜に勉強に取り組みます。受験勉強は独学だったようですが、例えば、英語は「中学一年からやり直した」と語っています（その後、石井さんは翻訳書を出版されています）。見事、東洋大学文学部に合格し、アルバイトで生活費と学費を工面しながら、大学を卒業しました。大学院にも進みました。苦しいことの連続であったと思われます。石井さんは次のように述べています。

苦しい時には二王子岳を、いつも思い出しました。

故郷のなつかしい風景が、困難を乗り越える力になったのでしょうか。苦しさの中で得たもの、身につけたこと、そして故郷の風景が石井さんの人生の核になっていると思います。当校校歌「新しき光 みなぎる 大空に 輝く高嶺 二王子の 姿尊く 仰ぎ見る 若き日の理想は高いそしみて 学ぶまことの 道深く」の歌詞が、石井春子さんの人生を語っているように思えるのは、私だけでしょうか。「若き日の理想」「若き日の希望」「若き日の誓い」を、人生において実現させ、自分で決めた道を、今も力強く歩まれている方が当校の卒業生にいらっしゃるのです。

みなさんの理想、希望、誓いは何ですか。